

「市民学びの会」シンポジウム

11月18日(日)午後に「学ぶ」ということをテーマにしたシンポジウムが行われた。当日は大学祭の期間中であり、大勢の学生や地域住民が訪れ、キャンパスはふだんと違い華やいだ雰囲気であった。祭りの最中に「かたい」テーマのシンポジウムにどれだけ集まるか心配であったが、会場の教室が一杯となり、盛況の会となった。



主催は9月に本研究科の院生・研究員や卒業生などを中心に設立された「市民学びの会」である。その設立趣意書には、「広く市民に学びの場と交流の場を提供する」など、市民と大学との連携を目的としている。この会は11月8日付の朝日新聞で「生涯学習 市民の手で」と大きく報道されたが、この記事を読んで参加したという女性も発言していた。

シンポジウムは『「学ぶ」ということ』と題した基調講演のあと、パネリストによる報告と質疑が行われた。4人のパネリストは本研究科の社会人院生であるが、それぞれの人生経験・体験と関わらせながら「学ぶ」ということについて、興味深い報告をした。断片的には知っていたが、4人の豊かな「人生経験」にもとづく学ぶ意欲と「苦労話」はじつに

示唆に富むものであった。

わたしも発言し



たが、いま本学部・大学院に冷たい「風」が吹いているが、これからも「市民学びの会」の持続的発展を期待していきたい。

(2007年11月19日 記)